

平成 25 年 4 月 15 日

英語語法文法学会主催

第 9 回英語語法文法セミナー開催のお知らせ

英語語法文法学会
会長 内田 聖二

英語語法文法学会では、学会の社会貢献の一環として、2005 年より毎年「英語語法文法セミナー」を開いてきましたが、今年も第 9 回目のセミナーを 8 月 5 日（月）午後 1 時から 5 時半まで関西学院大学梅田キャンパスにて開催することになりました。今年度のテーマは「英語文法・語法の最先端の研究成果を英語教育の場に：音・形・意味・機能・認知から英語の仕組みを解き明かす」です。プログラムの詳しい内容については当学会のホームページをご覧ください。できれば幸いです。

英語教育の現場では、教える内容は基本的に大きな変化はないように思われますが、ことばは時を経て変わっていきます。英語もその例外とはなりえませんし、むしろこのインターネットの時代ではそのスピードは増しつつあると言っても過言ではありません。このセミナーでは現代英語の語法や文法などの言語事象を最新の英語学、言語学の知見を紹介、援用しながら講義するものです。明日の授業に即役立つ情報も見つかるはずです。また、すぐに授業に反映できずとも、いつでも引き出せる背景知識が増えることになるのは間違いありません。

セミナーの対象としては、中学校、高等学校の先生方だけではなく、広く大学の教員、将来教職を目指す学生、院生などを想定しています。もちろん、学会員、非学会員を問いません。研修、研究の機会としてご利用をお考えいただければ幸いです。

たくさんの方のご参加をお待ちしております。

第9回英語語法文法セミナー

テーマ「英語文法・語法の最先端の研究成果を英語教育の場に：

音・形・意味・機能・認知から英語の仕組みを解き明かす」

司会・講師	菅山謙正	(龍谷大学)
講師	渡辺 勉	(拓殖大学)
講師	田村幸誠	(滋賀大学)
講師	住吉 誠	(摂南大学)
講師	前川貴史	(龍谷大学)
講師	五十嵐海理	(龍谷大学)

日時：平成25年8月5日(月曜日) 13:00~17:30

会場：関西学院大学梅田キャンパス

(大阪市北区茶屋町19-19 アプローズタワー10階1004教室)

プログラム：

13:00~13:20	菅山謙正 (龍谷大学) 「はじめに代えて: countability の本質に迫る」
13:20~14:00	渡辺 勉 (拓殖大学) 「英語の音声と意味の関係：付加疑問文を出発点として」
14:00~14:40	田村幸誠 (滋賀大学) 「文法から異文化コミュニケーションへ：認知類型論からの考察」
14:40~15:20	住吉 誠 (摂南大学) 「語法・文法研究と英語の変化」
15:20~15:30	-----休憩-----
15:30~16:10	前川貴史 (龍谷大学) 「言語現象の一般性と特異性：A Lucky Three Students の統語論」
16:10~16:50	五十嵐海理 (龍谷大学) 「メタ表示と否定」
16:50~17:00	-----休憩・質問用紙記入-----
17:00~17:25	ディスカッション・質疑応答
17:30	セミナー終了

参加費(資料代を含む)：2,000円(当日、受付にてお支払いいただきます)

※本セミナーは、学会会員以外の方を含め広く開かれているものですのでどなたでも自由に参加できます。会場収容人数(定員80名)の関係から、参加ご希望の方は平成25年7月31日までに、件名を「セミナー参加希望」として segu.seminar@gmail.com までお知らせください。先着順で受け付けます。

Society of English Grammar and Usage

- Open Workshop offered by the SEGU*
- Umeda Campus, Kwansai Gakuin Univ., Osaka, Monday 5th August 2013

9th Seminar on English Grammar and Usage

- Assuming the audience has little or no prior knowledge of English linguistics, the speakers outline the recent advances in English linguistics and how they can be used to describe various aspects of English sentence structure.

Attempts to integrate recent advances in linguistic studies directly into/onto English grammar teaching

「英語文法・語法の最先端の研究成果を英語教育の場には：
音・形・意味・機能・認知から英語の仕組みを解き明かす」

primary aim

認知言語学の知見も援用し、英語という言語の system を構成する 4 つの部門、音、形、意味、機能から英語の本質に迫る。英語の仕組みを理解して英語の本質を知る。中高の英語教員のよりよい授業のためのみならず、英語学研究を進める大学院生の論文・研究のヒントを提供する

Programme

Session : 1.00pm-5.30pm

■ Introduction & Talk 1: 1.00-1.20

菅山謙正 (龍谷大学)

「はじめに代えて：countability の本質に迫る」

名詞の countability は英語のみならずヨーロッパの諸言語の文法素性のひとつである。なぜ furniture は英語では数えられないのか？この問題を解くべく、boundedness/individuation/ homogeneity の 3 つの観点から、人間の認知の仕組みを考えながら、この謎を明快に解く。

■ Talk 2: 1.20-2.00

渡辺 勉 (拓殖大学)

「英語の音声と意味の関係：付加疑問文を出発点として」

この発表の目的は英語が「文法的な意味」を音声によって表現することが頻繁にあることを紹介することである。(1) It's not right, *is it?* (2) A: Mummy, can I have some cake? B: We'll have to see, *won't we?* (1)の付加部は 2 通りに発音可能だが、(2)では下降調になるのが普通である。(3) Do you smoke? (4) I don't like bacon. (5) Who likes spinach? という 3 つの文は、全て (6) I do. で応答可能だが、(6a) I ↘do. (6b) ↗I do. (6c) ↘I do. というリズムと音調で発話されなければならない。

* This workshop is supported in part by the JSPS (Japan Society for the Promotion of Science) Grants-in-Aid for Scientific Research (C) No. 23520587 awarded to Kensei Sugayama.

豊富な例を駆使しながら英語のリズムと音調が口語英語で用いられる有り様を示す。

■ Talk 3: 2.00-2.40

田村幸誠（滋賀大学）

「文法から異文化コミュニケーションへ：認知類型論からの考察」

英語の授業を行う上で、日本人教師を悩ます問題の一つとして、文法的に正しい文が、即、自然であるわけではないことがある。例えば、次の2文は、基本的には同じ意味であるけれども、通常のコテキストでは、後者の方が圧倒的に母語話者には自然と感じられる。(i) John went to the store on foot. (ii) John walked to the store. 同じような問題として、(iii) “The suspect walked out of the bar.” のような台詞が映画やドラマであった場合、その邦訳としては、「容疑者がバーから出てきた」が普通であり、walk の部分を訳して、「容疑者がバーから歩いて出てきた」と訳すと余剰的であり、何か「歩く」以外の移動手段が想定されていたかのように感じさせてしまう。また、日本語話者からすると逆に、(iv) “The suspect went out of the bar.” でいいところにどうしてわざわざ walk が出てくるのか不思議に思えたりする。

近年目覚ましい研究成果をあげている言語学の分野に認知類型論という分野がある。研究の一つの方向性は、様々な言語の話者に同じ一つの事態・場面を提示し、その事態を描写する際に各言語がどの側面に焦点をおいた記述を好むのかを綿密に調査し、その認知類型をまとめるということにある。本講義では、その認知類型論で得られた知見を上記のような文法の問題、あるいは、ディスコース構成の問題、さらにはポライトネスの問題等に応用しながら、「英語らしさ」とは何かという問題を一つの統一的な視点から考察していきたい。

■ Talk 4: 2.40-3.20

住吉 誠（摂南大学）

「語法・文法研究と英語の変化」

英語学習者は、なにも教科書だけで英語を学ぶわけではない。英字新聞やインターネット上で読むことのできるテキスト、実際の英語母語話者とのやりとりなど、さまざまな形で英語に触れる。その過程で、自身が教室で学習した英語の語法文法の知識と異なった表現や形に出くわすことも珍しくない。例えば have until X to V といったような前置詞句が動詞 have の「目的語」位置に生じる形、複合前置詞句 on account of が on account of + 節, on account + that 節, account of + 節などの形で接続詞に転用されたもの、相関構文 not only X but (also) が not only that (but) として接続副詞に転用される形、He asked me to “identify yourself”. のように to 不定詞句内に直接引用が生じる形、動詞 demand が demand X to V をとる形などである。そのような変則的な表現は、英語が生きていることの証である。教授者は、これらを教室で教えるかどうかは別にして、かつて自身が教わった英語が変化しているという認識を常に持って、謙虚に英語の事実を追っておく必要がある。本発表では、語法文法研究やフレイジオロジー研究の立場から、英語の変化について、英和辞典の記述も参考にしながら考えてみたい。

Break: 3.20-3.30

■ Talk 5: 3.30-4.10

前川貴史（龍谷大学）

「言語現象の一般性と特異性：A Lucky Three Students の統語論」

英語の *a lucky three students* や *an estimated 500 students* のような「不定冠詞＋形容詞＋数詞＋複数名詞」の構造は、以下の点において例外的な振る舞いを示す。第一に、複数形名詞を主要部とする通常の NP とは異なり、不定冠詞 *a/an* が義務的である。

(1) **(a) lucky three students*

第 2 に、通常の話順とは異なり、数詞は形容詞の後に来なければならない。

(2) **a three lucky students*

第 3 に、この構造が主語として現れた場合、動詞と単数で一致する場合と複数で一致する場合がある。

(3) *An estimated 43,000 people has/have died.*

本発表では、上記の特異性が一般性を損なうことなく捉えられる分析を提示する。言語というものは特異な現象から一般性の高い現象までが連続体となっていると考えられるが、本発表は言語のまさにそのような性質に焦点を当てる。

■ Talk 6: 4.10-4.50

五十嵐海理（龍谷大学）

「メタ表示と否定」

本トークの目標は「メタ表示」ということについて考えてみることである。メタ表示(*metarepresentation*)とは、平たくいえば、引用のことである。(1)のようなエコー疑問文、(2)のようなメタ言語否定にはメタ表示が介在すると言われていた(Noh 2000)。また、(3)のようなののしり表現による否認において、メタ表示が介在するとも考えられる。

(1) A: I'm leaving on Wednesday. B: Are you leaving on Wednesday?

(2) I'm not happy, I'm ecstatic.

(3) A: It doesn't mean anything. B: Like hell it doesn't. (= It means a lot.)

こうしたメタ表示が介在していると考えられる現象を、否定・否認を手掛かりに、記述的に分析していく。

Intermission: 4.50-5.00

Discussion, Q&A: 5.00-5.30

Close: 5.30